

【小学生の部】優秀賞

「ぼくができることからはじめよう」

坂井市立大石小学校 5年 小林 駿介



ぼくが住んでいる大石地区には、毎年「大石元氣村」というイベントがあります。そのイベントでは、空きかんつみやペットボトルポウリングなどの楽しいゲームコーナーがあります。子ども達に大人気で、四年生までは遊ぶ方に参加していました。

五年生になり、たん任の先生から大石元氣村でのボランティアほ集の紙が配られました。ぼくはその紙を見て、ボランティアをしてみたいと思いました。今まで楽しくゲームに参加していたので、今度はぼくが小さい子を楽しませてあげたいと思ったからです。ボランティアの内容は、受付係やゲームのお手伝いなどです。何の係になるかは当日までわかりませんでした。初めてするボランティアだけど、ぼくはどの係になってもがんばろうと思いい、当日までわくわくして待っていました。

元氣村の当日になりました。ぼくの係は、ゲームコーナーの中の輪投げ係になりました。

始まる時こくになるまでに、輪投げの輪を五つずつに分けたり、景品となるおかしを床にならべたりしました。後ろにいくほどむずかしくなるように、ならべ方を工夫して、みんなに楽しんでもらえるようにしました。

いよいよ、始まる時こくの午前十時になりました。お客さんがぞろぞろと入ってきて、

輪投げコーナーに大行列ができました。ぼくは、お客さんになるべく待たせないように投げる場所を三か所にしました。幼稚園の子も来ました。小さい子は、なかなか入りませんでした。だから、前の方から投げるようにしました。そうしたら、入るようになりました。

すると、幼稚園の子は、とても喜んでいました。ぼくは、「やった。よかった。」と思い、ぼくもうれしくなりました。景品のお菓子をあげると、「ありがとう。」

と笑顔で帰っていきました。喜んでもらえてよかったです。

輪投げを回収したり、景品をわたしたり、ぼくはお客さんに楽しんでもらえるようにがんばりました。あつという間の一時半でした。終わった時は、たくさんお客さんがきて、つかれたけど、とても楽しくて、来年もボランティアしたいと思いました。ボランティアはまず自分が楽しんだら、相手も楽しんでくれると感じました。

来年は、福井国体が行われます。ぼくは、福井国体でボランティアをほ集していることを知りました。ボランティアの内容は、来場者のゆうどうやかんきょう美化や花の水やりなどです。

もうすでに取り組んでいることがあります。それは、ぼくの地区では神社の花だんで、

花いっぱい運動に取り組んでいて、福井国体を応援しています。水やりをしたり、ラジオ体操の後は草むしりをしたりして、きれいな花をさかそうとがんばっています。そのほかに、福井国体に向けてぼくにできることはなんだろうと考えてみました。

まず、一つ目は、かんきょう美化のボランティアです。まずは、町をよごさないことが大切です。それから、ごみが落ちていたら拾うことです。いつでもどこでもできるボランティアです。二つ目は、道案内です。ぼくの家は駅の近くです。電車が走っていたりします。

もし、国体を見に行く人が駅や道で困っているのを見かけたら、自分から声をかけて手助けをしたいと思います。

ボランティアは、自分に気持ちがあれば、いつでもどこでもできると思います。いろんな人と仲良くなると、人との関係も深まると思います。これからも、自分にできることを考えて、取り組んでいきたいです。



【中学生の部】優秀賞

「手のぬくもり」

福井市桑中学校 2年 佐藤 美早紀



くじけそうな時。弱々しい手でそっと握り返してくれたあの手のぬくもりを私は今でも思い出す。

まだ肌寒い三月。私は、校外活動で、特別養護老人ホームを訪れた。私達がふれ合うお年寄りの大半は、体が思うように動かせない寝たきりの状態の方達。ゲームをやるようにもパズルはダメ。折り紙もできそうにない。どうコミュニケーションをとればいいのか全くわからない。

「はあ、元気なお年寄りの方が良かったなあ。」私は心の中でこっそり呟いていた。結局、紙芝居・歌・じゃんけんをやることに決まった。これで本当にお年寄りの方達に喜んでもらえるのだろうか。何だか億劫だな。そんな二つの気持ちがあぐるぐる渦巻いていた。

そして、当日、会場に向かうエレベーターの中、私は不安と緊張で一杯だった。そろそろと車椅子に乗ったお年寄りが集まってくる。中には見たこともない背もたれの高いベッド型の車椅子に横たわっている方もいた。

みんなが私達を見ている。ドクッ、ドクッ。高鳴る心臓の鼓動。

最初は、「大きな白いかぶ」の紙芝居。私達は、登場人物の声色を工夫したり、アレンジを加えたり一生懸命だった。次は、「見上げてごらん、夜空の星を」と「上を向いて歩こう」を合唱。車椅子に座ったままでメロディーに合わせて頭を左右に動かししたり、小声で口ずさんでくれるお年寄り、笑顔になったお年寄りを見て、私も自然と笑顔になった。何だか心がほんわか温かくなった。

そして、最後のじゃんけん、一工夫して、お年寄りが私達に勝ったら、勝った人と握手することにした。私は、腕を真っ直ぐに伸ばして、笑顔で、ゆっくり、はつきりと、「最初はグー。じゃんけんポン！」あれっ。私は気付いた。ベッド型の車椅子でさっきまではぐったりとしていた様子のおじいさんの手が、ゆっくりとパーになったことを。

私は目を見開いた。すぐさま、おじいさんのところに行つて、しゃがみこんだ。「いつまでも元気でいてください。」

だらんとしたおじいさんの手を、私の両手で包み込むと、そっとゆっくり握り返してくれた。ごわごわした節だった手。あったかい。そして、

「あ・り・が・と・う・。・。・」唇がかすかに動いた。今にも消えてしまふような途切れ途切れの声。この会場に来るだけでも大変なのに。思うように動かない体なのに・。・。

私は、想像しただけで胸が熱くなった。こんな私に、一生懸命一つ一つ力をふりしほり、言葉にして伝えてくれた。私は懸命に「今」を生きる姿に強く心を打たれた。はじめ億劫がっていた私。いつしか元気に、もっと笑顔になってほしい、心からそう思っている自分がいた。私は逆にお年寄りから元気と笑顔をもらったのだ。今日を精一杯生きるあの優しい手のぬくもりと共に。



【高校生の部】優秀賞

「ボランティアという経験」

啓新高等学校 通信制 2年 伊藤 啓太



「無償で人助けじゃなくて、無償で経験させてもらえるって考えなよ!」
ボランティアなんて面倒だ。行きたくないとおつづ言っていた私に、父がかけてくれた言葉です。

私にとってのボランティアのイメージはゴミ拾いです。小学生の時に何度か学校周辺や公園に行つてゴミ拾いをした記憶があります。正直、嫌で嫌でたまりませんでした。

「自分が捨てたわけでもないものを、しかも汚いものを、どうして自分が拾わなければいけないのか。こんなことやりたい人だけで勝手にやればいいじゃん。」と思っていました。こんな考えから、私はボランティアというものに対して、あまりプラスのイメージがありませんでした。ボランティア活動をしている人に対して、失礼なのですが、「つまらないことをしている偉い人」みたいに思つて、自分もしようと思つことはありませんでした。

今回、学校の活動でボランティアをすると言われたときも、面倒だしやりたくないという気持ちでいっぱいでした。

そんな気持ちでいた私ですが、父の言葉を聞いてなるほどと思いました。報酬がもらえないなんてアルバイトにもならない。といった否定的な考え方ではなく、ふだんできないことも体験させてもらえる機会だと考える。

そう前向きに考えると、今までのボランティアに対するイメージが大きく変わってきました。

ところで、ボランティアとはだいたい離れますが、消火器について考えてみたいと思います。消火器は、学校や公民館など人の集まる場所に設置してあり、自宅に設置している人もいるでしょう。黄色のピンを抜けば使えるというところは多くの人を知っているでしょうが、実際に使つたことのある人はほとんどいないと思います。このような状態で、「私、消火器が使えます。」と言えるでしょうか。知識としては使いつ方を知つていても、本当に火事が起きた時のような緊急の時に、実際に使つたことのない人が落ちていて操作できるでしょうか。かなり怪しいと思います。そう、考えると知識だけというののはやはり不十分で、実際に体験することや経験することの大切さがわかってきます。父に言われた言葉で、私は改めて経験の大切さというものに気づきました。そして、ボランティアは、「実際の経験」をすることのできる大切な機会なのだと考えるようになりました。

今回のボランティア体験では、私は、NPO法人「エコプランふくい」が小学生を対象に開催した体験教室を手伝いました。一回目は太陽熱を利用して水を熱する器具、二日目は、水を電気分解して発生させた電気でLEDを点ける器具を製作して体験しました。

会場の準備や後片付けなどの裏方作業から資料の配布、そして参加した小学生に作り方を説明したり作業を手伝つたりと、いろいろなお仕事を体験することができましたが、中でも小学生

の相手の仕方については、良い勉強になりました。高校生と小学生とで年齢が離れているということもありますが、日頃、こういう小さい子に何かを教えるという経験をしていないということもあり、どう説明をすれば理解してもらえるのか、どうすればわかりやすいのか、私にとって難しいものでした。うまくいかない私にエコプランふくいの方がアドバイスをくださいました。

「その子がどういう状態なのか理解するようにしよう。」

「何がわかつていて何がわからないのか、その子の様子を見て話を聞いてあげれば、うまくできるようになるよ。」

やはり、経験しているからこそわかることと違うのがあって、その経験というのが、私には足りないのだと改めて感じました。

ボランティアを貴重な経験のできる機会だと考えることで、今回もう一つ良いことがありました。それは、ボランティアを受け入れてくださった方に対して、ありがたいという気持ちを持って参加できたことです。そう思つて参加すると、説明してくださったことや、かけてくださった言葉を素直に受けとることができました。今回のボランティア体験は、ボランティアなんて面倒だと避けていた自分の考えを改める良い機会になりました。

今回の経験を通して学んだことを、これから活かせるよう行動していきたいと思つています。

【一般の部】優秀賞

「私にとってボランティアとは」

敦賀市

元山 眞優美



地域の公民館で、私が「あそぼっさ」という親子遊びの広場を立ち上げて、今年で十年目になります。支援センターと連携をとらせて頂きながら、毎月第四日曜日に活動をしています。活動のきっかけは、地区の回覧板でした。その回覧は、栗野子育てネットワークというボランティアの団体が、地域の子は地域で育てようをスローガンに発足したというお知らせでしたが、ボランティア募集もあり、

「あなたの力をお貸しください！」という文字を見て、私の心が大きく動いたのです。子どもと関わる事が好きで、親子の喜ぶ顔見たさに今も保育現場で働き、保育士として三十八年目になります。職場だけの人間関係では視野が狭くなると思います、様々な人と出会い、自分を高めたいと思う気持ちがありました。

又、地域で自分が出来る事をして、少しでも役に立ちたいと熱い思いを抱いていました。丁度、その頃、目にした回覧板に何の迷いもなく参加することが出来ました。

最近、友人から、「長く続いているね。」と言われます。振り返ると、立ち上げの際には右往左往の状況で、決して順風満帆ではありませんでした。継続が難しくなり心が折れそうな時もありましたが、志を共にした仲間と試行錯誤しながら助け合い支え合ってきました。今も尚、活動を続けられる事の難しさと尊さを

感じながらの日々です。

地道に活動を続けていく中で、参加者同士の交流の場から、ママスタッフが生まれ、共に活動する仲間が増えると、自然と人の輪が広がっていくのを感じています。又、「あそぼっさ」で使った下さい。」と手作り玩具を毎月届けて下さる地区在住の方や、農園主の方をはじめ、多くの人の温かい応援に支えられている事にも感謝しています。人とのつながりから生まれる心の和・地域の輪が少しずつ広がる喜びを体験できるのは、ボランティアの醍醐味です。

今から七年前の活動日に、忘れられない出来事がありました。その日は、台風と竜巻が発生し醜い悪天候でした。公民館のドアも開けられない状況であり、当然、車でも子どもを連れてこられないだろうと思い、申し込みの参加者の方に、中止の連絡をさせて頂いていました。

すると、悪天候にも拘わらず、一歳半位の男の子を連れて、おばあちゃんと、おじさんが遊びに来てくれました。その姿を見て驚き、「なんですか？」って思いました。

「申し込んでないけど、第四日曜日に公民館でしているのを回覧で見たから。」

と言って、こんな状況の中でも、お孫さんを連れて参加してくれたのです。男の子は、布玩具で魚釣りをしたり楽しく遊び、保護者の方は大変喜んで下さいました。

「今日は、本当に有り難うございました。」という言葉を頂いた時に、自分の心を恥じて、

深く反省をしました。きっと来れないだろうと思いついていた自分、場を求めて来られた三人の温かい笑顔に触れ、ボランティア活動に於いて、一番大切にしなければならぬ心を学んだような気持ちになりました。それは、人にそっと寄り添える心です。そんな心が持てる人間になりたいと思います。私は、これまで人に喜んでもらえたらベストという考えで生きてきましたが、ボランティアの奥にある根っこは、「人として如何に人に寄り添うことが出来るか。」にあるのではないかと考えるようになりました。まだまだ努力は足りませんが、自分のボランティアの目標にしていきたいと思えます。

最近よく活動が続けるといふ事の意味を考えています。続けるという事は、人を信じて生きる事に繋がるのではないかと思います。

これからの私は、お母さん同士のつながり、地域のつながりの輪が広がっていく事のお手伝いが出来れば幸せです。又、これまで自分が受け取ったものに感謝をし、今後も少しずつでも還元していきたいという気持ちがあります。家族にも社会にも。私にとって、ボランティアとは、人を豊かに育ててくれる心の財産であると信じています。

